「ドライビングオールナイト」

「ドライビングオールナイト」・登場人物表

立花先輩　（立花慎之介）システムエンジニア。三十代中盤。
大変腕はいいが少し変わり者と言われている。

狩野　（狩野翔）　新人の営業職。他社から転職してきた二十代中盤。
会社では人当たりのいい人気者。

SCENE1　雨の高速道路

BGM～

狩野ナレ　「外は大粒の雨が降っていた」

モニター表示　「ざーーっ」

会場　「ざーーっ」

SE　車の走行音&ワイパー

立花　「ひどい雨だな。」

狩野　「ええ。」

狩野ナレ　「ちょっとしたトラブルを処理するために、本来では営業職の俺は上司から

急遽システムエンジニアの立花先輩を車で二時間ほどの営業所に送る、運転手に任命された。

まあ、上司から頼まれたらなんでもする。営業なんてのはなんでも屋みたいなものだ。

トラブル処理がようやく片付き、帰り道についた頃には
時計はてっぺんを越えようという時間だった。
真夜中の雨の高速道路を、車は東京に向けて進んでいた。」

立花　「それにしても、君のお陰で助かったよ。ありがとう。」
狩野　「いえ、僕はただ車の運転してただけですよ。」
立花　「いや。今晩中に直せていなかったら、いろいろと危なかったんだ。」
狩野　「そんなに大変なことだったんですか?」
立花　「ああ。明日まで放置してたら、本社のメインシステムまで巻き込んで
会社の機能が1週間ほどは使えなくなるところだった。」
狩野　「え!そんなにヤバかったんですか。」
立花　「最悪の場合はそうなってたってだけのことだけどね。
とりあえず、間に合って良かったよ。」

狩野　「はあ。僕はまだシステムのこととかよく分かってないんですけど、こういうのってオンラインとかで出来るもんじゃないんですか？」

立花　「うん、単純なことならね。でも、結局使うのは人間。人間が使えばミスも起こす。そういうのは現場まで見ないとわかんないからね。」

狩野　「ふーん。そういうものなんですね。」

立花　「まあ、そういうものなんだよ。大騒ぎしたらケーブルが１本外れていただけなんてことは、よくあることさ。」

狩野　「ああ、なるほど。ってそういうことだったんですか？」

立花　「まあね。人間ってのは、慌ててるとそういう基本的なことを見逃したりするもんなんだよ。」

狩野ナレ　「雨は依然として、ずっと降り続いていた。」

モニター表示　「ざーーーっ」

会場　「ざーーーっ」

立花　「なあ、暇だからちょっとしたゲームでもしないか？」

狩野　「ゲーム、ですか？」

立花　「ああ。」

狩野ナレ　「助手席の先輩はそう言うとカーラジオのスイッチをポチっとオンにした。」

会場　「ぽちっ」

（前回のラジオ）

立花　「ルールは簡単。お題を決めて、このラジオの中で最初に出てくるお題のものは
なにかってことだ。」

狩野　「ん？どういうことですか？」

立花　「じゃあ、そうだなあ。最初は動物ってお題にしてみようか。
この二人の会話の中で最初に出てくる動物の名前を当てようってことでどうだろう。」

狩野　「ああ、なるほど。わかりました。
うーん、そうしたら僕は犬でいきます。」

立花　「そうだなあ、じゃあ猫にでもしておこうかな。」

（2分半くらいのとこまで、少しアドリブで会話しつつ）

二人　「たぬきかあーーーー。」

（ラジオ適度に編集　15分23秒くらいのとこへ）

狩野　「面白いですね、これ。」

立花　「だろ?じゃあ、次のお題は君が考えてみてくれ。」

狩野　「そうですね、そうしたら野菜とかどうですか?」

立花　「いいね。あ、一応だけど、野菜の定義はどうする?」

狩野　「野菜の定義?」

立花　「そうそう。ほら、野菜と果物で曖昧なヤツとかいるだろ。」

狩野　「ああ、そういうとこやっぱ先輩理系ですね。」

立花　「一応そういうところきっちりしておかないと後からモヤモヤするからさ。」

狩野　「野菜って一年草が多いんですよね。確か。」

立花　「そうそう。ただその分類だと、スイカとかメロンも野菜になるからな。」

狩野　「ああ、確かに。うーん、そうしたら、お題変えましょう。

ストレートに食べ物とかどうですか？」

立花　「わかった。カレーは飲み物とかそういうのナシな。」

狩野　「「食事として食べるもの」って定義で大丈夫ですか。」

立花　「お、そういうのそういうの。わかりやすくていい。」

狩野　「先輩の考え方わかってきましたよ。じゃあ、今度は先輩から。」

立花　「そうだなぁ、番組で話題に出てきそうな食べ物か。ラーメンで行こうかな。」

狩野　「ああー、取られたー。そうしたら、僕はチャーハンにします。」

立花　「チャーハンの話題なんて、出るか？」

狩野　「いや、ラーメンのこと考えたら頭の中がチャーハンでいっぱいになっちゃって。」

立花　「それ、会社の近くの中華屋のランチメニューだろ。」

狩野　「ラーメンに半チャーハンと餃子ついてるアレ、月の半分はアレ食べてますよ。」

立花　「あそこって美味しいの？」

狩野　「うーん、なんていうか、特別美味しいわけじゃないんですけど、
これでいいよねって味なんですよ。家庭的というか。優しい味というか。」

立花　「そっか、じゃあ今度食べに行こうかな。」

狩野　「それじゃ、今度一緒に行きましょうよ。」

（なんとなく喋りながらラジオ聞く）

（18:57 あたり）

狩野　「やったー！チャーハン！」

立花　「すげえ！やるじゃん！」

狩野ナレ　「その時、タイミング良くぼくのお腹がぐーと鳴った」

モニター表示　「ぐーーーー」

会場　「ぐーーーー」

立花　「なんか盛り上がったら腹減ったな。」

狩野　「もうちょっと先に深夜でもやってるサービスエリアあるんで寄って行きましょう。」

立花　「お、いいね。ラーメン食うぞ、ラーメン。」

狩野　「そこはチャーハンじゃないんですか？」

立花　「まあ、正解したからな。いいだろ。チャーハンでもラーメンでもおごってやるよ。」

狩野　「やったー！ありがとうございます！」

狩野ナレ

「いつも気難そうなシステムエンジニアの先輩と、
この深夜のドライブで一気に距離**が縮まった**。
ここからはじまった二人の関係は、また今度。」